2022年8月28日(日)
読売新聞
（第3種郵便物認可）

クローズアップ

有機農業 世界見据え

プレマ・オーガニック・ファーム 飯野 晃子 社長 42

赤城山麓に広がる肥沃（ひよく）な農地。小松菜を化学肥料や農薬を使わない有機栽培で育てている。小松菜の有機農業としては国内最大級の規模で、販路は海外にも広がっている。「SDGs（持続可能な開発目標）とも密接につながる有機農業を世界中に広めたい」と意気込む。

英文学を学ぶために進学した大学時代が転機になった。上京して一人暮らしを始めて約1週間、心身ともに不調を感じた。体が重く、何をするにもおっくうになった。食生活を見直し、弁当の購入をやめ、自炊生活を始めると、すぐに体調が回復した。同時に、素材本来の味を感じるようになった。

食に対しての関心が高まり、大学の図書館では食と農業に関する本を読みあさった。有機栽培への興味がわき、群馬や長野で挑戦している農家を頻繁に訪れるようになった。大学卒業後、有機農業の研究をしようと、農学系の大学院を探して回った。しかし、高収量や効率的な農法が研究の中心だった。「儲（もう）からない」とされた有機農業を研究対象とする大学はほとんどなかった。

小松菜の生育具合を確認する飯野社長（前橋市で）

アジアの環境経済を研究する東大大学院に進学して、経済の観点で農業に近づいた。研究のための農村調査では、人口大国のインドを選んだ。「人口急増を背景に、農法の効率化が求められている国でも、有機農業は可能だと証明したかった」

インドの農村では、多品目を栽培しながら牛や鶏を飼育し、そのふんや育てた植物で自家製肥料を作る農家らに出会った。土に負担をかけず、資源が循環する農業があった。自らが求めていた理想の姿だった。

帰国後、有機食品の販売会社での勤務などを経て、2015年、父から前橋市の現農場を引き継いで社長に就任した。インドで学んだ農法に倣い、伊勢崎市の酪農家から牛ふんを取り寄せるなど、肥料は自社でまかなう。虫の付きやすい葉物は特に野菜の中でも有機栽培が難しいとされるが、手間のかかる雑草処理や害虫のチェックも農薬には一切頼らず、約40人の従業員が手分けして効率良く行っている。

現在はコロナ禍で輸出が滞るが、17年以降はシンガポールやフランスなどでも小松菜の加工品を継続的に販売。来月には農場付近に有機農業の体験イベントや食のセミナーを開くための施設が完成する。

「有機農業も効率化を図ればもっと広められる。有機農業で世界的なモデルの農園にしたい」。視線は世界を見据えている。

（桜木優樹）

いいの・あきこ　1979年10月、栃木県足利市生まれ。東大院農学生命科学研究科修了。2015年に農場を経営する「プレマ・オーガニック・ファーム」社長に就任。有機JAS認証に加え、18年からは農作物の安全性を示す国際認証「グローバルGAP」を毎年取得している。2児の母。

G三軍に逆転勝利

交流戦

れしい」と選手名の書かれたタオルを掲げて応援した。ユニホーム姿で観戦した藤岡市の団体職員坂本彬さん(36)は「目当ての選手監督は「悪天候の中でも観戦してくださったファンのためにも、一時、逆転できたのはよかった。結果は残念だったので、次に向けて

宿泊施設情報 県HP誤掲載

宿泊割「愛郷」